

中津祇園 — 歴史と伝承 — (2)

金丸吉郎

(一) 中津祇園の形態

中津祇園は現在毎年七月二十三日から三日間行われている。二十三日を「曳き出し」、二十四日を「朝車」、二十五日を「戻り車」という。それは昭和四十六年に、中津祇園保存振興会が出来て、今迄別々に行われていた上・下の祇園祭を一本化してからの事である。それまでは、下祇園は旧暦六月十四日・十五日、上祇園は新暦七月十七日・十八日の二日間であった。もっとも「曳き出し」は上・下ともその前日である。

今では「曳き出し」の前日又は前々日から「町内踊り」と言って、自町内だけを曳き回り、踊っている町内もあるが、これは町内の踊り個所が多く、「曳き出し」の日だけでは消化出来ないために踊っているわけで、祇園祭日としてではないわけである。さて祇園祭が近づくと、一ヶ月位前から各町内は、度々寄り合いをして、祇園祭についての打合せをする。本年度当番の選出、車上舞踊団の選定、祇園車の損傷、備品の修理、経費の問題、山車建ての日時等、いろいろと相談して、当番に当たった人は祇園祭を終了迄全責任を負うわけで、交通の問題、保険の問題、各町との連絡とか細微にわたって、祇園祭に関する準備をする。

二週間位前から、鐘・太鼓のいわゆる祇園囃子の稽古が始まる。この祇園囃子が遠く近く聞えて来ると、いやが上にも祇園

祭の近づいた事を知り、市民の心は沸き立って来る。祇園祭を期して市中では大売出しを始める。市中の出入は賑やかになって来る。いよいよ祇園祭も近づくと、山車建てをするが、これは大安吉日のよい日を選んで建てる。町内踊りも始まる頃になると、町々の辻に青竹の高ノが張られ、高張提灯が吊される。

「曳き出し」の日の二十三日は、自町内を踊り、夕刻それぞれの本宮、上の方は中津神社、下の方は關無浜神社へ山車を集結させるのである。境内へ曳き入れた山車は、そこで景気よく練り回す。

この練り方については、上の方は境内をグルグルと円形に曳き廻るが、下の方では西の浜から御神殿の前迄、直線的に何回も行った戻ったりする。この時には、鐘・太鼓の音も一段と激しく、曳き手の若者達は全精力をぶっつけて練るわけである。この山車練りは、最後日の「戻り車」の夜が一番の圧巻である。

曳き出しの日は、早めに終り、決められた場所へ山車を曳き入れて終る。

その夜は大分合同新聞主催の花火大会が、中津城下の中津川原で行われる。近郷近在から数万の人が出て、祇園祭初日に花を添える。

祇園祭と花火は大変よい取り合せである。

豊橋祇園は、古くから「花火祇園」として有名である。毎年七月二十三日には、全国花火コンクール等も行われて、大変な賑わいである。中津の花火大会は昭和五十一年から行われる様になったものであるが、未永く続けて行ってもらいたいものである。

いよいよ「朝車」の日となると、午前三時、第一発の花火が揚る。午前正四時に「御神移し」が行われ、五時三十分打揚花火を合図に、先車が出発する事になっている。

昔の御神幸表を見ると、「午前正二時祭式執行す。官司修葺切火の式祝詞奏上、御神輿へ御遷座終て、午前正三時三十分、二発の祝砲と同時に行列順次本宮御発籠の事」と記されている。いくら夏の朝とは言え、三時三十分出発は一寸早すぎる様だ

が、ちゃんとこれを実行していたのである。

昭和五十五年の中津祇園御神幸筋並山車踊り所表を見ると、

- 1 本宮御神前、2 下正路町中の辻、3 北堀川町中の辻、4 北堀川町東の辻、5 北吉原通東の辻、6 豊後町東の辻、7 豊後町中の辻、8 豊後町西の辻、9 桜町下の辻、10 桜町中の辻、11 桜町上の辻、12 姫路町上の辻、13 姫路町中の辻、14 北門通西の辻、15 北門、米町塚の辻、16 米町中の辻、17 米町上の辻、18 船町上の辻、19 船町中の辻、20 船町・塩町塚の辻、○塩町橋本
- 車朝食 (午前九時先車進行)
辻、(午後二時先車進行)
酒屋前、21 塩町中の辻、○午後五時先車塩町田原邸前夕食、22 船場町上の辻、23 北堀川市場塚の辻、24 境内西の浜闇無町、(二番車)
25 境内南鳥居竜王町 (二番車) (午後八時半先車進行)

境内御旅所に先車より順次御着

花火

境内御旅所に御神輿御練込

花火

となっている。

この日は夕刻、上・下全部の祇園車が福沢通りに集結する。福沢通りは歩行者天国となり、餅撒きや子供神楽、市内全体の婦人会の踊り等いろいろの催しがあつて、福沢通りの大通りは人の波で埋まってしまう。そして午後八時半から、先車より順次進行を始め、上の方は中津神社へ、下の方は闇無浜神社へと曳きつける。

境内へ入った山車は又盛んに、山車を練り廻す。夫々の山車が練り終り、最後の御神輿が境内の御旅所に入るのは、大低夜の十二時を過ぎてからである。夜の山車進行中は、それぞれの山車の後に、二・三十本の高張提灯が供奉して、火の流れが続いて壮観であつたが、これも昭和初期まで、其の後は途絶えてしまった。

翌二十五日は「戻り車」である。戻り車の日は朝は割合遅く、八時に先車が出発する。「朝車」の日に廻らなかつた町内を通つて廻り、高ノを建てている踊り箇所を踊る。

五十五年度、戻車御神幸筋並に山車踊箇所表を見ると次の様になっている。

1 御旅所御神前、2 角木町西の辻、3 角木町次官の辻、4 角木町東の辻、5 角木新町高ノの辻、6 南堀川町東の辻、7 稲堀町高ノの辻、8 新堀・袋・山下町堺の辻、9 仲間町高ノの辻、10 鷹匠町中の辻、11 富士紡前の辻、12 天神町扇城の辻、13 寺町中の辻、14 船町上の辻、15 船町中の辻、16 船町・塩町堺の辻、17 塩町中の辻、18 船場町下の辻、19、下正路町次官の辻、20、境内西の浜園無町、21、境内南鳥居龍王町
(御神輿)
 (五番車)
 (四番車)
 (三番車)
 (二番車)
(先車午後八時進行)
 (先車夕食六時二〇分)
 先車より順次御着

御神輿本宮へ御練込、還御祭

花火

山車順次社頭御礼踊

終って先車より順次各町帰車

となつてゐる。

境内へ曳いて帰つた山車は、本日が祇園祭の最後とあつて、若者は精根の限りを尽して、山車を練り廻るのである。その勇壮さは全く物凄い。ここにおいて、中津祇園の真髓を見る事が出来るのである。

日中、街中を巡行する時は、王朝絵巻を見る様な優雅さを持った祇園車が、この夜の練込みとなると、飛龍の様に、怒濤の様に豪壮な姿に一変する。これこそ中津祇園の、最も優れた、誇り高き祭りであると高く評価される所以である。

全部の山車が夫々所定の位置に着いてから、最後に御神輿の練込みが始まる。この御神輿の練込みが約一時間かかる。それも終了するわけであるが、山車を曳いて帰る頃は、もう短かい夏の夜がしらじらと明けそめる頃である。熱心な人はそれまで見なければ、気が済まないのです、その頃でも境内は沢山人出である。昔から、そこに若者達の楽しい語らいがあり、恋が往々にして芽生えたりする。祇園は縁結びの神でもある。

精根を打込んで山車を見いた若者達は、打ちひしがれた様に寝込んでしまうが、一眠りして翌日は「山車崩し」と言つて、

山車をとり崩して倉庫へ納入してしまう。町内に建てていた高ノ等も取払い、その夜は「打ち上げ」といって、楽しい慰労会が催される。無事に祇園祭を終えた。満足し切った顔で、皆晴々として祇園話に花を咲かせる。酒が出る。歌が出る。踊りが出る。楽しい夜である。

こうした事が毎年毎年繰返されて、数百年の中津祇園を支えて来たのである。

次に上、下祇園祭と各町内のことについて少し述べて見よう。

(1) 上祇園祭

上祇園祭は、先に述べた様に、中津神社夏季大祭の事であり、その区域は主として、中津の中心商業地である。したがってこの祇園祭は直接、自分の商売に關係するお祭りである。

この神社に關係する山車を出す町内は、新魚町、諸町、京町、新博多町、古博多町、古魚町、片端町、殿町の八町内であった。片端町と殿町は藩政時代は武家屋敷であったため、昔からあったのはその二町を除いた六町内であった。

商業都市にふさわしく、全て豪華で、派手である。特に新博多町の山車は彫刻や飾り物が立派で、先年大分市で開かれた「ふるさと祭り」に出品し、人々を驚かしたという。ほとんどが二階造りであるが、京町諸町が一階造りである。本来中津祇園の山車は一階造りが本当の姿であるが、だんだん豪華を競うようになって二階造りにしたものである。

戦後、新魚町が山車を他市に売ってしまい、現在は神輿を担当している。したがって山車は全部出て七台である。その七台の山車は全部「踊り車」で各町内の演出もいろいろと競い合い、上手な舞踊団と交渉したり、子供歌舞伎を演じたり、又は近年町内の子供に舞踊させている所もあるがこれは見ていて大変気持ちのよいものである。

(2) 下祇園祭

下祇園は中津祇園の自家筋に当るわけである、地域は海岸線から中津市の北部区域にわたる。この地区には、漁業、大工、左官、石工、建具等の職人町、花街が主体となっているので、上の方の祇園とはおのずからその性質も気風も異なる。

上の祇園を見せる祇園とするならば、下の祇園は自らが祭りにとけ込んだ祇園である。上の祇園は、多くの人に来てもらって、商業の発展に繋ぐことの出来る祇園であるが、下の方では直接に利益にはつながらない。

それだけに祇園祭と一体となって、大いに祇園祭を楽しむのである。下の方は最も山車の多い時は、十台出ていたが、現在では七台である。

山車の順序は昔から決まっていた、新しく出来た山車が先頭であった。先車は龍王町、次が船場町であった。両町内とも明治になってから、山車を造った。次が米町、船町、堀川町、姫路町、塩町、桜町、豊後町、下正路町の御神輿と続いていた。龍王町と下正路町が船車で、豊後町が影向楽という雅楽を奏する御神殿車であり、その他は全部踊り車であった。船場町は昔からの花街で、曳き手も少く、遂に昭和の初め頃山車を売ってしまった。買手は一、〇〇〇円で買うというのを、何日間もねばって交渉の末、遂に、一〇一〇円で売ったという。現在ではそんな山車を造るとしたら、一〇〇〇万円でも出来ないというのに、一〇円上げてもらうのに大変苦労したらしく、全く隔世の感である。

次に塩町が山車を手離してしまった。塩町は戸数も少く、藩制時代はかなり賑やかな商店街であったが、明治以降は京町、新博多町に客の流れは変わってしまった。地域的にも恵まれなかったのであるが、それでも戦後までずっと山車を出して、心意気を示していた。しかし、昭和二十七年の祇園に出した後、遂に福岡県田川郡川崎町に売ってしまったのである。その頃は戦後の混乱期であり、神仏に対する考え方も違って来て、祇園祭に浮き立つよりも、まず食糧を探るのが大変な時代であった。塩町は祇園車を五〇万円で売った。当時は炭鉱が花形産業であった。田川郡には炭鉱成金が続出して、大変な景気であった。当時五〇万円というのは大金であり、塩町は古くなった祇園車を売って、新しく新調する予定で手離したのである。川崎町には「塩町」という町名はなかったが、祇園車に「塩町」の扁額がついているので、新しく塩町という町名を作ったという。戦後の渾沌期らしい話である。山車を売った塩町は、それを基金にして貯蓄を計ったのであるが、それ以後の時代は急速に変化して行った。塩町の計画は見事にはずれた。祇園車の新造等は、はかない夢となって消え失せてしまったのである。

下祇園ではもう一台の山車が消えていった。それは豊後町の山車であるが、豊後町山車は、下正路船車と共に中津祇園を代表する祇園車であった。豊後町という町は、古く大友時代からの町で、中津で最も繁華を誇った町であった。大友街道とよばれ、その町筋は老舗が軒をつらね、蛸瀬口へ至って城外へ出ている。品格のある町である。中津祇園が「作り物」から山車に変えたのも、この豊後町の発案により、小笠原公に懇請して出来たものという、いわゆる中津祇園山車の発祥ともいえるものである、

豊後町の山車は、美しい古代朱塗りの優雅な御神殿奉斎車である。二階車で二階には囃子の子供達が乗った。そして「影向楽」という雅楽を奏するのであるが、金飾の天冠を被り、白衣の唐衣に真紅の母衣を背負い、胸のあたりに小鼓を下げた稚児数人が、この雅楽に合わせて舞うのであるが、その舞姿は優美とも優雅とも全く言葉を知らず、見る人をして感嘆せしめた舞踊であった。当時この稚児に出ることは、家の誇りでもあった。この影向楽に選ばれた稚児の家では、親戚や近隣知己からお祝を言われ、稚児は沢山の祝儀袋を頂いた。祭りの日が近づくと、祝い扇子や、大黒・恵比須のお面、大判小判の紙幣、短冊や紅白の布切れを吊した青笹を軒先に出して、稚児の供奉を祝福した。祭りの日になると、雇傭人を使って、出演する稚児にお供をさせ、大傘をさしかけて日除けをしたり、大扇子であおいでやったりして、つき添って稚児を大切にしたのである。

この様に由緒ある豊後町であったのに、それが戦後、人心の変化により、その尊い御神殿車を踊り車に変えてしまい、遂には姿まで消してしまったのである。豊後町の町内に、三百年の伝統を守り抜いてゆこうとする人物のいなかった事は残念至極である。

とかく、時代に応じて余り深く考えないまゝで、物事を改めようとする事が行われるが、長い伝統を続けて来た物に対しては、それなりに重要な事が備えられているのである。それを一時の思いつきや、その時代にに応じて、安易に変更することは考えものである。まして、「祭り」に関しては、特にたやすく変更すべきものでないと痛感するものである。

山車の消滅はともあれ、せめて「影向楽」と「稚児舞」の復活をと、心ある人は望んでやまないのであるが、町にその機運

の盛り上らない事は、これも残念なことである。ここに「影向楽」の歌詞と、稚児舞の記録を記して、せめてもの参考にしよう。

影向楽

開けし国は久方の御代

天津神代の祭り事

宮居涼しき闇無の浜

出船入船あれを見よ

すまの浦若木の桜

散らで残るはそなれ松

千早振る千早振る

神と君との道すじに

打ちおさまれる御代なれや

君も豊かに澄む水の

流れの末の末々も

歌えたわむれ千代に八千代に。

影向楽記録（延享元年 一七四四）

母衣大将 二人

豊後屋忠兵衛、子、孫次郎

豊後屋惣兵衛、子、松次郎

楽人 八人

かどや庄之助、

島田屋利兵衛、子、松次郎

宇佐屋 虎松、

吉野屋惣兵衛、子、八十之助

むすめや甚与、子、卯之吉

三浦屋 嘉平、子、虎松

佐田屋 勘助、子、七松

宇佐屋伊兵衛、子、徳松

笛 五人

ぶんごや 新平

丁字や松左エ門

近江や 利兵衛

万屋 吉郎平

万屋 権七

太鼓 四人

きくや 善七

小間物や 権七

はりまや孫兵衛

丁字や 七松

鉦 三人

升屋 三六

松葉屋 伊三郎

せたや 岩松

手拍子 三人

とめや 太吉

とさや 又三郎

舟木や 五郎

小歌 六人

升屋 清平

塩崎屋 藤吉

丁字や 清七

田中屋 惣吉

市はせや徳右エ門

近江や 平作

総計 三十一人

右之通相認御奉行様江二通指上申候

延享元子六月七日

こうして十台出ていた下祇園の山車は、現在七台となってしまうたのであるが、そのうち船町は戸数も少く「曳き手」もない事等で、最近は何内に建てて、飾っておくだけとなっている。しかし立派な祇園車が残されているだけでも大変喜ばしい事で、又何時かは、巡幸に参加出来る日もあるであらう。

下祇園で戦後変わった事は、下正路と同じ船車であった龍王町が、踊り車に変更したこと。これも船車では観てくれる人が少く、淋しいという所から踊り車に変更したのであるが、もともと下正路から別れた祇園車であるので、これもやむを得ない事である。

一番先頭を切っていた竜王町が、踊り車に変更したので、数百年来決まっていた車の順序を変えた事も、戦後の変動の一つでもある。即ち今迄の順序を一変し、下正路船車を毎年先頭とし、その他の五台の山車は順次輪番制としたのである。

(二) 下正路船山車の由来

(1) 下小路浦

中津市の一番地は下正路町から始まっている。周防灘に面した、一番北端に当るからである。昔は「下小路浦」と言っていた。現在の金谷方面を「上小路」といい、諸町殿町近辺を「中小路」といい、最北端を「下小路」と言っていたのである。

「上小路」も「中小路」もその名称は、消えてなくなったが、下小路だけは昔の名称が残っているのである。

この下小路は、藩制時代は海の玄関として栄え、阪神・中国・四国方面とも交易が盛んで、大変賑っていた。「銀杏町」という花街も、この町の一部であった。何百石積み帆船が、この城下の川口を往き来していたのは、もう昔の夢である。この下小路浦の突先に・閨無浜があり、わが中津祇園も、この下小路浦にお迎えして、鎮座したわけである。

誠に由緒ある町である。

(2) 下小路次官じかみん

下正路町を「次官」という。神社と特殊の間柄により与えられている町の資格である。中津祇園関係では、下正路町と角木町の二町だけである。両町内のみに「次官の辻」というのを設け、他の山車も全部、この辻で踊ることになっており、所謂、表敬の意である。

夏の祇園大祭と秋の大祭の時、下正路町では、「次官祭」という厳肅な祭りを執り行う。下正路町で当番になることは、即ち「次官」になるということで、昔から大変名譽のこととされていた。

昔、行われていた当番の選出方法を紹介しよう。祇園祭が六月十四日、十五日であったので、その一ヶ月前に当番を決めていた。それは神官によって「みくじ」で決められていた。下正路町内には、次官になる家格を持った家が五・六軒あり、その人の名前を夫々白紙に書いて、三宝の上にのせる。宮司が厳かにお祓いをした後、その三宝の上の、名前を書き込んだ紙片をご幣で挟い、上へ上げると一枚の紙片がそのご幣に、くっついて上がって来る。そのくっついて来た紙片の人が、当番となるわけで、神意に叶ったとされ、大変名譽のことと皆からお祝いされていたのである。

(3) 次官祭

次官祭は夏の祇園祭と秋の大祭の時に、当番の家で行う。祇園祭の「曳き出」の日、町内の有志は当番の家に紋服姿で集る。当番の家では、朝早くから祇園神紋を染め抜いた幔幕を張り、「次官提灯」を左右に吊し、代々下正路浦の宝物とされた木製の大戈二本を家の前に立てる。床の間には、豊日別宮を上段に、天照皇大神荒魂神を中央に、その右側に祇園三社神、その左側に住吉三神と書いた掛軸をかかげる。神前に神酒、大鯛、山菜、果物等を供える。やがて神官が来て、この家の次官になった名替を壽ぎ、下正路町の繁栄を祈り、祇園祭中の無事故を祈願してお祓いをする。

神事が済むと、そこに祝膳が出る。この祝膳の料理は昔から献立が決っていた。

(4) 祇園料理

下正路次官祭の料理は、夏と秋との違いはあったが、その献立は数百年来ずっと一定していた。古文書による祇園祭の料理を見ると次の様である。

六月十四日献立

赤味噌吸物 赤い い なすび さんしょう

肴 えび

差身 こ津魚 からし酢

さしみ たこ 生が酢

干肴 小切

御神酒

質素な料理であるが、厳肅な祭典の後、威儀を正して食した町長老方の面目が、思い浮べられる。先年市内の「郷土史を語る会」の役員会で、この祇園料理を再現してみよう、という事になり、市内枝町の料亭、筑紫亭の御協力によって、計器等も昔のものを使い、一同で食し、昔の祇園祭に思いを馳せたのである。

(5) 曳き出し

下正路町では、次官の家の前で曳き出し第一番の、歌い初めをすることになっている。次官祭の始まる頃には、船山車ふねぐるまも次官の前まで来ている。神事が済んでから神官は、山車を始め、歌い子、山車曳き、囃子方等にお払いをする。当番の組で作った、直食の料理が出て、皆で祝い、景気をつける。この料理には昔から、赤エイと瓜の酢物を使うことになっている。胡瓜が祇園神紋に似ているので使わないということは、他でもよくあることである。そして歌い初めが済んでから、いよいよ曳き出しとなるのである。

(6) 下正路船山車の構造

下正路の船車は、中津祇園山車の原型である。無論一階造りで、台輪の高さが割合低くつくられている。これは車の安定性を考えて、作られたもので、柱も榎も桁も天井も、すべて嵌め込み式になっている。昔、城門をくぐる時は、天井を低く倒して通過していたという。心棒と台輪の間隔が割合広く、自由に曲ることが出来るように工面されているのも、他の山車と違った構造である。御神輿を積んだ舟を中央に乗せて、よく重心を整えている。

梶棒は一本で、前にはなく後だけである。山車全体を船に見立てているので、ふたし 舳(船首)の方に左右二人、とも 櫓(船尾)の方に左右二人、そして梶棒に三・四人だけで、残りは綱を曳く。車の進行状態を見て、舳についている者が、「取り梶!」「面梶!」と叫ぶ。櫓についている者が、「梶取り」にそれを伝える。「梶取り」はそれに従って、梶棒を肩に入れて、右に左に動く。

今は市中で練る事を禁じられているので、車はゆっくり動くが、昔はほとんど走っていた。それがかえって皆を、元気づけたものである。下正路の山車が走ると、ゆさゆさと右に左にゆれてゆく。これは他の踊り山車では見られない事である。すべて嵌め込栓で自由に動く様になっているからで、その揺れ動いて行く姿が又、何とも言えない美しいものである。街中で曲り角に来た時は、一度そこで子供が歌い終った後、又山車を後方二・三十米引き戻す。そして音頭取りの振り上げる御幣とかけ声と共に走り出し、街角をぐるりと曳き曲る。この時こそ、舳、櫓の台輪つきと、梶取りの腕の見せ所である。

激しく打ち鳴らす囃子と共に、大きな山車が、くるりと曲った時の壮快さは、山車に携った人でなければ味えない。正に曳き手と、梶取りと囃子方が一体となった時である。曲った山車はその勢いで、四・五十米もそのまま走って行く。真に勇壮であり豪快である。船山車でなければ味えない醍醐味である。

(7) 下正路船車の扁額

祇園山車の前面の梁には、各山車とも扁額が掲げられ、それには、「〇〇町」という町名が書かれている。ところが下正路町の扁額は町名でなく、「天鳥丸」という扁額がかかっている。これは「天鳥丸」という船を、小笠原公から戴いた由緒によ

る。「天鳥丸」という意味は、天鳥あめのとりがねのかみ船神ふねのかみから来ているもので、天照大神は中国平定の国譲りの交渉に、使者として建御雷たけみかづら神のかみを選び、これに天鳥船神を副えて、葦原あしはらのなかつくに中国に旅立たせたと、古事記には書かれている。天翔ける鳥のように速い船という意味である。誠に由緒ある船名である。

現在掲げられている扁額、「天鳥丸」は隸書体浮彫文字で、実に高尚優雅な字体で彫られている。その額の裏面には「豊前国下毛郡大江郷庄下小路浦車再興」「大將軍、神武高連天鳥丸」とあり、製作の宮大工は「椋野谷西屋舖村一ツ家、塗師忠蔵」と書かれている。年号は、享和三年（一八〇三）癸亥六月とあるので、今より約一八〇年前で、奥平中津藩第五代の昌高公の時代である。昌高公は文化の高い藩主であり、その頃の作であることを考えれば、その高雅さもむべなることと思うのである。

(8) 下正路御船歌

中津祇園山車の中で、一台特異な山車があり、それは下正路町の御船山車である事は、前に述べた通りであるが、下正路山車では、稚児十二・三人にて「御船歌」というものを歌うのである。この御船歌について、少し述べて見ることにしよう。藩政時代には、全国の御城下に「御船歌」というものが、必ずあったのである。藩主が参勤交替のため船出する時とか、藩で新造船を作った時とかに、歌われていたものである。そしてこの御船歌は、「御船手」とか、「船手頭」と呼ばれる士分格の船頭によって、歌われていたのである。

木遣や音頭とはその性質を異にし、一般の人には歌唱を許されない格式ある歌であった。藩侯に召抱えられた士分格の船頭だけしか歌う事を許されなかった歌である故に、幕府が倒れると同時に、この「御船歌」も消滅して行ったのである。

下正路船山車で歌う歌は、中津藩時代の「御船歌」であることは、金井清光著『民俗芸能と歌謡の研究』にも指摘の通り間違いないことであるが、歌詞がほんの一部しか残っていない。それも書き残したものではなく、毎年祇園祭の時しか歌わない口伝の歌である。長い年月の間に、いろいろと曲が壊されたことは、致し方ないと思う。事実私共が子供の頃は、他に何曲か

習った記憶もあるが、祇園祭の時は、今歌っている歌詞のもので、他のものは忘れてしまった。

最近の子供の歌うのを聞いて、私共の子供の時と、余りにも大きな違いであったので、私は驚き、このままでは大変なことになると思い、昔を思い出しながら友人と歌い、テープにとってみた。恐縮であるが、実は私方の先祖も士分格の船主であった。その関係で私方には、「祇園大帳」という大きな綴り物が六冊保管されている。年々の祇園祭についての収支や、いろいろのことを書き込んでいる。

その中の一冊で、享保十五年の綴りの中に「祇園車船歌之序」と書いて、次の様な一文がのっている。

「抑大舟の始めといえ、天鳥舟、岩楯舟に諸手舟、えびす三郎の釣りの舟、浦島太郎のいさり舟、神功皇后の軍船いくさぶね、是を海の城廓とも神通殿とも申すなり。また国主の御船は、屋形めでたの御座船、川舟、堰舟作り、さがってござれ波切丸あきない、商舟は楳作へさい作り、東海作りあまに小早舟、伊勢路の舟はさやまき作り、たしから作り、北国通いのさいの作りは磯作り、但馬の国のふたなり作り、蝦夷渡りの玉冠作り、世界はまろき丸太舟、所々のならはせに言ひ伝へたる名なるべし。忝くも人皇八十八代、後深草の院の御宇に、初めて船法を改まひて、土佐、薩摩、兵庫の津に一軸を免ゆるしたまふ。舟師の始り是通かや。かかる目出度き代々なれば、神をいさめの氏子ども、舟歌をはじめ候へ。」

この文の末尾に「舟歌をはじめ候へ」とあるので、これから子供達の御船歌が始まったものと思う。昔はこの御船歌を歌う子供達は、袴を着て花笠を被っていたのであるが、現在は何もかも略式となり、法被姿となっている。

ここでその「御船歌」をご紹介します。

下正路御船歌

音頭 やーんらい、目出たいな

ご代ーんわ、目出たのんのー

えい、そりやん若わか

歌手 枝もえい、えい栄えの、えゝ

此んの葉もえい

音頭 さても見事なお庭の小松

末ははんは鶴つるかはんはめ 五葉ののー松

目出度のんの えいそりやん若

歌手 枝もえい、えい栄えの、ええ

此んの葉もえい

音頭 千代八千代 双葉ふたばの松の茂みより

歌手 げにも音聞くらなしく閑無くわなしのほんやんらい

音頭 浜の宮居みやゐのんほい

歌手 年毎としごとにえい松はん よしの氏うぢことに

えいやよ、えいや此んのほーい

音頭 御興みこしのんのお供まごえーい

歌手 賑おこがねわえや陸船りくせん、曳ひけよ一節いちせつしおえ歌うたうて

御代ごよは歌方うたがたの み代みよは尽つきせぬ

末すえかけてやらやんらーい

音頭 目出ためでたの又またのんのえい若わんかーい

歌手 枝えだははんはん葉はも千代ちよえいえい

えいざらざんざ、茂さかる

音頭 目出度のんやーれ えい若わか

歌手 枝 葉もやよ

音頭 えいえい栄える

歌手 のうえい此こゝの葉もえい

慶応四年徳川幕府崩壊以来一―三年。中津藩の「御船歌」は下正路町によって、固く守られて来たのである。中津祇園と下正路町、次官である下正路町は永遠に中津祇園と手を携えてゆくであろう。

このほか「船山車曳出し歌」として、古くから歌われている松前音頭というのものもある。しかしこれは、音頭であり、一般の人も歌うことに何ら制約もなかったもので、崩壊することもなく、全国各地に同種類の歌が残っているようである。

ホラーエー きょうは吉日ヤーエー

ヤットコセー ヨイヤナー

吉日祇園さんの祭り ハヨ―イトセー

ホラーレバ アリヤリヤ

アヨイトコ ヨイトコセー

ホラーエー おもてに立つのがヤーエー

ヤットコセー ヨイヤナー

立つのが浪切不動 碇いかりは金山竜玉権現 ハヨ―イトセー

ホラーレバ アリヤリヤ

アヨイトコ ヨイトコセー

ホラーエー ろくろに水繩みなわがヤーエー

ヤットコセー ヨイヤナー

水縄がほれたじゃないか

ほれた証拠にや巻かりつく ハヨーイトセー

ホーラーレバ アリヤリヤ

アヨイトコ ヨイトコセー

ホラーエー めでためだがヤーエー

ヤットコセー ヨイヤナー

めでたが三つ重なって

末は鶴亀五葉の松 ハヨーイトセー

ホーラーレバ アリヤリヤ

アヨイトコ ヨイトコセー

ホラーエー めでためだのヤーエー

ヤットコセー ヨイヤナー

めでたの若様様は

枝も栄える葉も茂る ハヨーイトセー

ホーラーレバ アリヤリヤ

アヨイトコ ヨイトコセー

ホラーエー この後追いますヤーエー

ヤットコセー ヨイヤナー

追います若い衆に頼むハヨイトセー

ドウトコ ドートコセー

この途端、鉦・太鼓の囀子を激しく打ち鳴して、威勢よく山車を曳き出すのである。

歌詞は、音頭とりの古老が一人うたい、はやしことばはその他の曳き手がうたう。

渡辺澄夫先生古稀記念事業会編

『九州中世社会の研究』

A五判 五三四頁 頒価五、〇〇〇円（送料共）

本書は渡辺澄夫博士の古稀を記念して知友・門下生十五氏が、主として九州中世の政治・経済・社会に焦点をあてて執筆した最新論文から成るものです。各論文とも従来の九州中世史に新しい一頁を加えたものであり、また九州史からとらえた日本中世史という観点からも本書の持つ意義は極めて大きいがあります。

申込先 渡辺澄夫先生古稀記念事業会事務局

〒870 大分市大手町三一一一一 大分県総務部総務課県史編さん班内

送金方法

郵便振替（下関一一五一九）にてご送金ください。銀行振込の場合は大分銀行県庁内支店普通預金口座番号一四二八七二（渡辺先生古稀記念会代表秦政博）をご利用ください。

自費出版のため一般書店では取扱いません。当事業会に直接お申し込みください。